

閉会挨拶

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター長
初澤 敏生

ただいまご紹介にあずかりました、福島大学の初澤と申します。この研究会の共催団体であります福島大学うつくしまふくしま未来支援センター長としまして、閉会のごあいさつをさせていただきたいと思っております。

私は先週、いま話題になっておりました、福島県大熊町という所で行われましたツアーに関係者として参加しておりました。そこから帰る途中、参加者の方が「アカデミズムっていったい何なんでしょうね」とおっしゃいました。その方は、避難地域に住んでいらっしゃるのですけれども、その地域のまちづくりに関しまして、福島大学の研究者が関与して、いろいろな復興計画を議論していた。ところが、地元の間人から見ると、とうてい納得できない。それで、その先生が参加している学会が東京で開かれて、復興計画についての発表があるというので、そこに行った。すると、その先生の発表に対して、その学会の中では非常に高い評価が与えられた。その方は大きな衝撃を受けたとのこと。地域の人間が全然期待していない計画を、そんなに高く評価する学会のアカデミズムって、いったい何なんだろうと。そのような問いかけがあったのです。これは、学会の研究というようなものが、どうも社会から遊離してしまっているのではないかと。

いろいろな学問が細分化されてしまっている。そして、関係者の中だけでコミュニティーをつくってしまう。これは決して「原子力村」だけではなく、我々の周りにも存在しています。我々も知らず知らずのうちにその一員になっている。その結果、研究者の主張、発想が、あまりにも世間の常識とずれてきてしまっているのではないかと。そのところは、もう一回擦り合わせなければいけないのではないかと。私はそういうような意識を持っております。

この災害文化研究会、繰り返し述べられていきますように、研究者だけの組織ではない。そして、

特定の学問分野に限定された狭いところを研究するのではない。そこに新しい可能性を見いだすことができるのではないかと。そのように私は期待しております。

そして、今日、非常に挑戦的な題名の講演がありました。北原先生の「自然災害と大量死 死者はどう葬られてきたか」。これまで、研究会が避けてきたテーマではないかなと思います。でも、これは被災地では求められていたことです。

私は、ある市の市長さんと話をしたことがありました。そのとき、この地域をどういうふうにも復興させていきますかというようなことで、地図を見ながらいろいろと話していたのです。そしたら、その市長さんがこう言われたのです。「この地域は、復興の前に鎮魂が必要だから」と。

行政は、宗教と関わることはできません。しかし、鎮魂しなければ、地域は先へ進めないのです。それをどのようなかたちで行うか。そのように考えていくと、やはり宗教というのは、避けては通れない課題かなと、そういうように私は考えております。

そのようにして見ていきますと、今日の講演内容は、非常に刺激的なものでした。そして、こういうような、ある意味、学際的な内容を取り込んでいかなければ、復興は進めない。そういうように感じています。

このような講演会を行うことができる災害文化研究会は、非常に大きな可能性を持った組織ではないかな、というように私は感じております。新しい学問の分野を切り開いていき、新しい復興を目指して進んでいっていただきたい。そのように期待しております。

長くなって申し訳ありません。私からの終わりのあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。